

## 紹介

清水廣一郎著

### 『中世イタリアの都市と商人』

本書は、去る一九八八年四月二十九日に死去された清水廣一郎氏の遺稿集である。清水氏の初期の論文は、既に『イタリア中世都市国家研究』(岩波書店、一九七五年)に掲載されているので、本書に収められた論考は、それ以降のどちらかといえば一般向きに書かれたものを中心としており、たいへん平易な文でわかりやすい。本書にはさらに阿部謹也、森尾総夫、斎藤寛海の三氏の鼎談が付け加えられている。

それでは、簡単に内容を紹介しよう。掲載されている論考は、大別すると二つに分けられる。一つは、地中海商業を広く見ようとするもので、特にガレー船を始めとする船の問題が取り上げられている。「I地中海と海賊」「IIジェノヴァ・キオス・イングランド」「III地中海貿易とガレー船」がこれに当たる。「I地中海と海賊」は、

一三、一四世紀の小話を取りながら、海上交易と海賊行為が表裏一体のものであった時代の地中海商業の武装の側面に光を当てている。「IIジェノヴァ・キオス・イングランド」は、地中海商業の一つの雄ジェノヴァに焦点を据えながら、一般にいわれる「地中海商業はガレー船活動による奢侈品貿易」というイメージが一面的であることを示す。大型帆船が明礬のように重くて安価な商品を運ぶといったかたちでおこなわれた中継貿易が、最盛期ジェノヴァの商業で大きな意味を持っていたことが明快に説明されている。「III地中海貿易とガレー船」では、地中海貿易を代表する「ガレー船」の船そのものの構造、使用法の発展から、地中海貿易を概観している。

もう一つは清水氏がずっと研究課題としてこられたイタリア中世都市に関わるものである。絶筆となった「VIIIイタリア中世都市論再考」において、都市史研究におけるイタリア都市論の意味を検討し、展望を試みようとしておられたことが知れる。この論考が未完に終わったことはまことに遺憾である。ただ、一九八七年の歴史学会での講演を記録した「VIIイタリア中世都市論再

考」で、清水氏が考えておられたことを窺い知るのみである。ここでは、ヨーロッパ都市研究史を概観した上で、従来典型的なヨーロッパ都市の裏返しとみられてきたイタリア都市が、実は一つの典型のための素材を提供していることが指摘されている。すなわち、最近の都市研究では、従来リジッドに分けられてきた「都市」と「農村」の関係が見直されており、「周辺の世界、農村の世界との絆を維持して、その組織化と統治の中心となった都市」と位置づけられてきたイタリア中世都市のもつ性格が他の都市にも認められるようになっていく。さらに、都市がもつ二面性、つまり経済的・文化的、宗教的に人を引きつける中心地としての機能からくる開放性と、恒常的に住む住民が運営する共同体が持つ閉鎖性が、イタリア都市においてはより鮮明な形で現われてくるのである。

このようなイタリア都市の性格をより具体的に描いているのが、「IVイタリア中世都市の『市民』と『非市民』」「V中世末期イタリアにおける職人・労働者の移動」である。前者は「市民」と一口にいつても、共同体内の「市民」にもいくつかのレヴェ

ルがあり、さらに都市には共同体には含まれないものの都市経済に不可欠な「外国人」がいる。その関係はルーズであることを示す。後者は、前者で示された「外国人」の中で、特に広範囲に移動して行く職人や労働者像を史料から浮かび上がらせている。

さて、清水氏がイタリア都市の中で特に研究対象とされてきたのは、ピサである。清水氏は、一四世紀ピサの公証人文書を調査され、イタリアでもその成果を刊行されている。本書に掲載された論考にもピサへの言及がしばしばみられるが、「Ⅵ 中世末期イタリアにおける公証人の活動」は、中世イタリアで活発な活動を展開した公証人について、ピサ、フィレンツェを中心とする紹介となっている。

以上、簡単に本書に盛られた清水氏の論文の内容を紹介した。このほか本書には、清水氏と同時期に大学院で研究をされた阿部謹也氏、森尾総夫氏、また中世イタリア史を研究し同時期に留学された斎藤寛海氏の鼎談が付け加えられており、本書では触れられなかった研究上の業績を含めて、清水氏の人となり、研究方向などを知るのに役立つ。ただ、あえて欲をいえば、『中世イ

タリア都市国家研究』以降に清水氏が発表された論文は他にも多数ある。たとえば、婚資についても何度か発表されているにもかかわらず、本書には所載されていない。さまざまな理由があるが、今後清水氏の業績がまとめられるチャンスがないとすれば、なんとかここにまとめて載せてほしいかと感じずには入れられない。

清水氏が、日本における中世イタリア史研究をリードされてきたことは周知のことであろう。清水氏はご自身の研究のほか、「紹介」「書評」も数多くなされ、中世イタリアに関連するさまざまな概説をこなされてきた。清水氏の業績は日本国内にとどまらず、清水氏が研究されていたピサで、共に研究を進めていたM・ルツァティ、G・ロッセッティなどの研究者からも評価されていた。三度にわたってイタリアに留学され、研究を進められていた研究の在り方は、西洋史研究のモデルとなるものだった。今後のさらに一層の活動が期待されていただけに、五〇代半ばという若さで世を去られたことはいくら惜しんでもあまりある。紹介者もまた、清水氏に教えを乞い、アドヴァイスを受けた一人である。哀悼の意を

こめて、本書が多くの人の目に触れることを願いたい。

(B 6判、二三二頁、洋泉社、一九八九年  
一二月、定価二〇六〇円)  
(山辺規子 京都橋女子大学助教授)

日本学術会議だより

— No. 17 —

平成二年五月 日本学術会議広報委員会

◇日本学術会議第一〇九回総会報告

日本学術会議第一〇九回総会(第一四期  
・第五回)は、四月一八〜二〇日の三日間  
開催された。

(中略)

今回総会では、次の勧告、対外報告が採  
択された。

①地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)の実施について(勧告)

このIGBPについては、以前から会長召集の検討会議や関係する部会、研究連絡委員会等で検討が続けられてきたが、この度、これらの検討結果を踏まえて、人間活動と地球環境に関する特別委員会のIGBP分科会が中心となって今回の勧告案を取りまとめたものである。